

皆さん こんにちは。文化財課の児玉です。現在、当課では国史跡 浪岡城跡や国史跡 高屋敷館遺跡の史跡整備、大釈迦工業団地にある野尻(4)遺跡の発掘調査など、浪岡地区の遺跡に関連する業務に取り組んでいます。



野尻(4)遺跡の発掘調査の様子(平成29年)

このようなことから今回は、浪岡地区の遺跡の概要について述べたいと思います。浪岡地区は、現在約100ヶ所の遺跡が確認されており、古くから人々の往来や文化交流が盛んで、津軽平野と外ヶ浜とをつなぐ交通の要となっていたようです。

縄文時代後期の松山遺跡と源常平遺跡からは、それぞれ複数の土器棺<sup>どきかん</sup>(成人骨の収納容器)が出土しており、当時の墓制を考える上で貴重です。縄文時代晩期では、細野遺跡から多量の亀ヶ岡式土器が出土し、平野遺跡や源常平遺跡から数多くの土坑墓<sup>どこうぼ</sup>(土葬用の墓)が見つかっています。

弥生時代を経て古代になると、土師器<sup>はじき</sup>や須恵器<sup>すえき</sup>を使い、製鉄を行う蝦夷<sup>えみし</sup>とよばれた人々が居住するようになり、独自の地域社会を作っていました。浪岡地区では、この時代の遺跡の発掘調査事例が目立ち、羽黒平遺跡群、野尻遺跡群などからは非常に多くの竪穴建物(住居跡や工房等)が発見されました。そのなかでも、11世紀にもっとも栄えた高屋敷館遺跡は、壕<sup>ほり</sup>と土塁<sup>どるい</sup>に囲まれた特異な集落遺跡で、鉄に係わる生産活動などが行われていたようです。

やがて武家社会となり、東北を広く治めていた北畠氏が、南北朝の動乱(室町時代)後に落のび居住したと考えられる地が浪岡城であり、この浪岡城を拠点に活躍した一族が浪岡北畠氏です。浪岡城が営まれたのは北畠顕義の時代、応仁の乱(1467~1477年)の前後と推測され、北畠氏が浪岡に来ておよそ50年、土地に根ざししだいに力をつけた頃のことと考えられます。1500年代前半の最盛期には、京都と盛んに交流し、寺社を建立するなどしています。しかし、1562年におきた親族間での争いにより勢力が衰え、1578年に大浦(津軽)為信に攻められ落城してしまいます。以後、約400年、城跡は畑や水田として使われてきました。昭和15年2月に青森県で初めて国史跡指定を受け、現在は史跡公園として多くの人々に親しまれています。